

八雲の乳牛飼養 —— 十勝と対比して

鈴木 省三

(帯広畜産大学)

規模拡大に気を取られ、とかく大まかな酪農に走りがちな現代の風潮に流されてしまわないために集約的で密な行き方の良さを再認識する必要がある。経営面積の制約が強い道南、特にその歴史と現状からみて道内の集約的な酪農の代表とも言える八雲町で現地研究会を開催しようというのが管理研究会の主なねらいであったように思われる。ところが現地では、八雲の酪農は“先発後進”つまり、歴史は古いが後進地に先を越され、後を追いかけている、という声も強い。

模範的集約か、後進か、を1～2日の視察と乏しい資料をもとに判断することは難しい。いずれにしろ、どこか他の地域と比較してみなければ、その特徴・規模・集約の程度は分らない。といって、天北・根釧と比較するのは環境がちがい過ぎるので、私の地元、十勝、その中でも酪農の町を標榜する大樹町・鹿追町を比較の対象に取上げた。前者は海岸地帯、後者は山麓地帯から選んだつもりである。

1. 乳牛飼育頭数

表1は、八雲・大樹・鹿追3町と十勝地区全体の乳牛飼育農家戸数、飼育頭数を示したものである。3町の総農家戸数中に占める乳牛飼育農家の割合は、揃って70%強となっており、町・農協共済・関連会社などの酪農に対する関心の厚さは、かなり類似したものがあると思われる。

表-1 農家戸数と乳牛飼育頭数
(昭和49年)

	総戸数	乳牛飼育戸数		頭数	1戸平均
	戸	戸	%		頭
八雲	586	430	73.4	8,956	20.8
大樹	413	305	73.8	9,706	31.8
鹿追	494	350	70.9	6,977	19.9
十勝	13,068	6,105	46.7	132,439	21.7

1戸平均飼育頭数は大樹町のみ多く30頭を越え、他の2町および十勝全体はほぼ同じである。この平均飼育頭数の差をさらに詳細にみるため、飼育頭数規模別の戸数割合を算出したものが表2である。

表-2 飼育頭数別農家戸数の割合 (%)

(昭和49年)

	1~4頭	5~9	10~15	16~20	21~30	31~	計
八雲	11.8	15.1	17.9	11.1	19.8	24.8	100
大樹	4.9	6.6	7.9	10.5	19.7	50.5	100
鹿追	6.6	16.6	17.4	17.7	23.4	18.3	100
十勝	9.2	13.8	17.2	17.8	19.8	22.2	100

31頭以上の飼育規模の農家が50%を越える大樹町を別にすると、八雲・鹿追・十勝全体の間には決定的な差はないとみられよう。八雲町と鹿追町とを比較すると前者では16~20頭規模がやや少く、代りに1~4頭規模と31頭以上の農家の割合のやや高いのが眼につく。しかし、5~15頭、21~30頭規模では大差ないところからみて、八雲町の酪農に階層分離の傾向が特に強いとは言えない。

このような飼育頭数規模からみて、十勝よりも小頭数集約的経営になっているとは考えられない。

2. 飼料作物の栽培面積

昭和49年の飼料作物栽培面積は表3のようになっている。乳用牛の生後1年までを $\frac{1}{3}$ 、1年を越え2年までを $\frac{2}{3}$ 、2年を越えるものを1の割合で成牛換算頭数を算出し、成牛換算1頭当りの飼料作物栽培面積を求めた。

飼料作物を給与するのは乳用牛ばかりでなく、肉用牛にも利用されるが、その飼育頭数(肉用種とホルスタイン種去勢牛)は乳用牛に対し、大樹町28%、鹿追町8%、十勝全体21%、八雲町11%で、しかも肉用牛の飼料作物利用は乳用牛に比べ一段と低いと考えられるので、1頭当りの面積の算出には入れていない。

こうして得られた1頭当りの飼料作物栽培面積は、八雲町0.67haで、0.98~1.05haになる十勝に比べ明らかに低い。とくに、表4に示した飼育頭数規模の大きい経営例では、1頭当り0.3~0.6haと著しく土地集約的経営となっている。

表 3 飼料作物栽培面積

(昭和49年)

	面積 ha	成牛換算頭数	1頭当面積 ha
八雲	4,823	7,161	0.67
大樹	8,857	9,058	0.98
鹿追	5,692	5,733	0.99
十勝	113,653	108,581	1.05

注：面積は北海道農作物統計より算出

表-4 1頭当飼料作物栽培面積例 (八雲町)

	A 例	B 例	C 例	D 例
飼料作物栽培面積 ha	23.0	19.5	17.0	15.2
成牛換算頭数 頭	43	33	54	40
1頭当面積 ha	0.53	0.59	0.31	0.38
経産牛1頭当産乳量 t	7.0	5.0	6.5	4.7
乳飼比 %	22	50	-	40

注 : 経営概況プリント、および聴取より

1頭当りの経営面積の少い点を補なう方法としては、

- (1) 飼料作物の反当収量の増大
- (2) 購入飼料の増加
- (3) 1頭当りの生産量増加(維持養分の相対的減少)
- (4) 育成牛率の減少

の4点が考えられる。

3. 粗飼料の供給

70%に満たない栽培面積で同じ量の粗飼料を供給しようとするれば、当然反収増を見込まなければならぬ。表5・表6は北海道農作物統計から過去3年間の飼料作物平均反収と平均栽培面積を抽出したものである。

八雲町の平均反収は、牧草において42~45%、家畜用ビートにおいて13~61%十勝よりも高いが、青刈とうもろこしは大差なく、飼料かぶはむしろ反収が低い(表5)。

根菜類は作付面積が少いから(表6)、その反収の多少が粗飼料全体の給与量に与える影響は問題にならない。したがって、牧草の反収の差と牧草よりも反収の多いとうもろこしの作付面積の差が実際上大きな影響をもつ。

表 5 飼料作物平均反収 (Kg/10a)

(昭和47-49年平均)

	牧 草	青刈とうもろこし	家畜用ビート	飼料用かぶ
八 雲	4,143	5,043	5,107	3,377
大 樹	2,887	5,040	4,517	4,367
鹿 追	2,863	5,180	3,170	3,247
十 勝	2,913	4,933	4,153	3,903

注 : 北海道農作物統計より算出

表-6 種類別飼料作物栽培面積 (ha)
(昭和47-49年平均)

	牧 草	青刈とうもろこし	根 菜 類
八 雲	3,283 (70.3%)	978 (2.1%)	92 (2.0%)
大 樹	6,720 (85.8%)	1,000 (12.8%)	89 (1.1%)
鹿 追	4,623 (83.5%)	891 (16.1%)	12 (0.2%)
十 勝	94,600 (87.6%)	12,400 (11.5%)	757 (0.7%)

注 : 北海道農作物統計より算出

この2つの表から、成牛換算1頭当りの粗飼料生産量を推算すると表7のようになる。八雲町では十勝に比べて高い牧草反収と、とうもろこし作付面積の割合の大きいことによって、総体的な土地の狭さのある程度補ってはいるが、それでも、鹿追・十勝全体に比べて15%、大樹に比べても数パーセント粗飼料供給量が少い計算となる。

表-7 成牛換算1頭当生粗飼料生産量 (t/年)

	牧 草	青刈とうもろこし	根 菜 類	計
八 雲	19.0	6.9	0.6	26.5
大 樹	22.4	5.6	0.4	27.4
鹿 追	23.1	8.1	0.1	31.3
十 勝	25.4	5.6	0.3	31.3

購入粗飼料や濃厚飼料でこの不足を補ってもよいという特殊な条件が八雲町にあるとは思えないから、この不足分を粗飼料の質の改善と、圃場から牛の口に至るまでのロスの節減によってどれほどカバーできているかが問題であろう。

4. 生産乳量

昭和48年度の生産乳量は表8に示すように、経産牛1頭当り年間産乳量は八雲町4.36tである。この量は十勝全体より6%多いが、鹿追に比べると4%、大樹町に比べると逆に幾らか低い。

表 8 産 乳 量 (t/年)
(昭和48年)

	総 乳 量	経産牛1頭当	牛乳落等率%
八 雲	19,251	4.36	0.53
大 樹	19,434	4.42	0.18
鹿 追	16,267	4.20	0.04
十 勝	28,186	4.10	0.19

1頭当りの産乳量が高いと、飼料粗効率を高め、産乳量単位当りの維持養分必要量を低下させ、同時に粗飼料の生産効率を高くする働らきが生れるから、経営面積の狭小な酪農家にとっては重要な点である。しかし、八雲の酪農には、この面での特徴はみられない。

5. 乳牛の構成と資質

表9に乳牛の構成割合を示した。八雲町の平均経産牛率は55%で、十勝と大差はない。24か月令以下の育成牛の割合はやや高い。その理由を明らかにすることはできなかったが、いずれにしても、経産牛率を高くして、土地の狭小・粗飼料の不足の対策とする方向に指向してはいないとみられよう。

表-9 乳牛の構成 (%)
(昭和49年)

	0~11か月令	12~24か月令	経 産 牛
八 雲	19.5	21.1	55.1
大 樹	16.7	18.5	56.0
鹿 追	17.8	17.9	54.3
十 勝	18.4	17.2	57.5

乳牛はやや小型といわれ、改良の面で道央・道東におくれをとっているとの声もあり、体型・乳房の形など、旧型のものが多い感じを得た。その点を確める一つの方法として、町育成牧場預託牛の発育状態を調べた。

育成牛257頭の入牧時の体重と体高を十勝上士幌町大規模育成牧場の調査値(2,408頭)と比較してみたのが図1・2である(標準はホルスタイス登録協会のもの)。体重・体高とも上士幌の成績よりむしろ上廻っており、一般に大型との評価を得ている十勝の牛に決して劣らない。

図1. 育成牛の体重

体
重

kg

500

450

400

350

300

250

200

6

8

10

12

14

16

18

20

22

24

26

Mo.

標 津

八 雲

上 土 幌

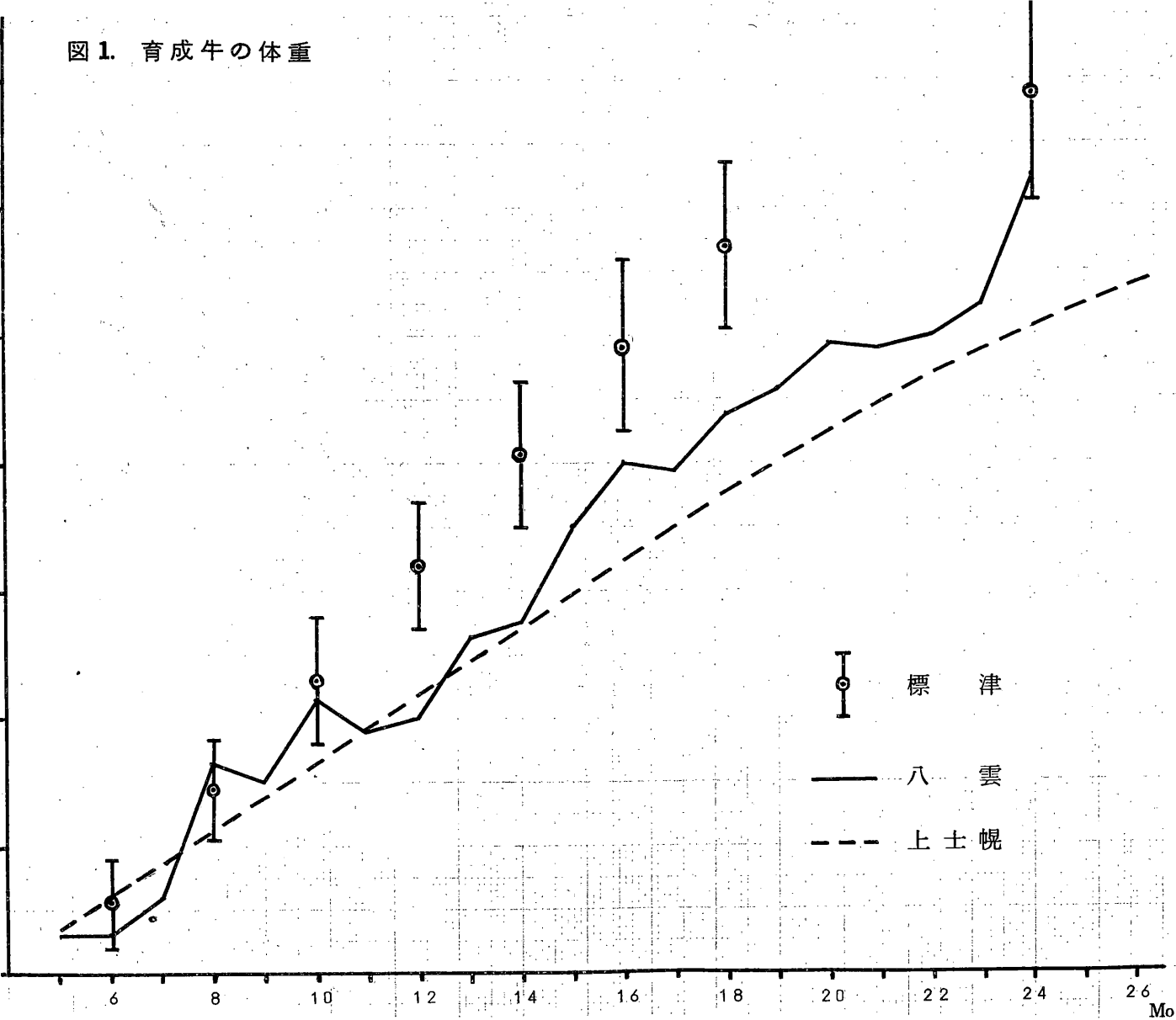
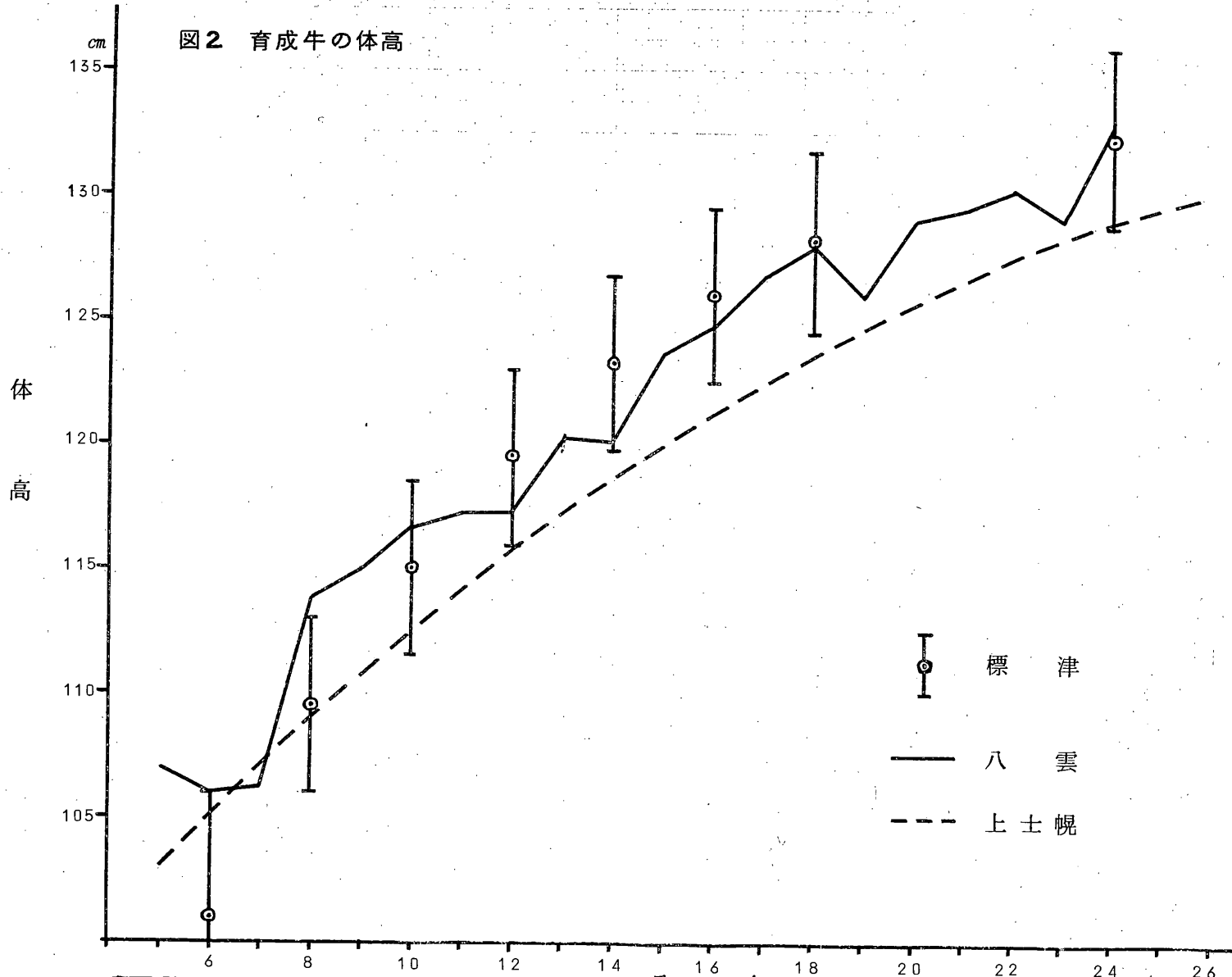


図2 育成牛の体高



成牛が小型であって、育成牛の発育は速いとすれば、育成牛飼養管理の差が原因とみなされるが成牛の体格を調査する機会を得なかった。種雄牛の広域利用が行われている今日、体格的にも能力的にも、その資質にさほど大きな相異があろうとは考えられない。

6. 施 設

飼育頭数が増加したため、継ぎ足し牛舎の多いのが目立つ。中には3次・4次にわたる増築もあり、中・小型サイロを3本・4本持った牛舎も珍らしくない。新築牛舎の多い十勝とは対照的である。施設に無理な投資をしない堅実さの表われとみる。ただし、そのために、牛舎内作業の不便さや、機械化の難しい欠点は避けられない。

バーンクリーナ・パイプライン搾乳施設を備えた酪農家戸数と、30頭以上飼育農家戸数に対するその割合をみると(表10)、バーンクリーナでは十勝と大差なく、パイプライン施設では十勝に比べてかなり少い。十勝には、搾乳牛20頭台でも頭数増を見越してパイプライン施設を備えた牛舎があり、この点にも、堅実な八雲酪農の歩みが表われている。

表 10 バーンクリーナとパイプライン搾乳施設
(昭和49年)

	バーンクリーナ		パイプライン(含パーラ)	
	戸数	割合(%)	戸数	割合(%)
八雲	30	28.6	18	17.1
大樹	43	27.9	53	34.4
鹿追	25	39.1	18	28.1
十勝	357	26.3	369	27.2

注：％は30頭以上飼育農家戸数に対する割合

バルククーラーの普及率は80%で、大樹(54%)・鹿追(19%)・十勝全体(14%)に比べて著しく高い。

ま と め

経営面積に制約のあるところでは、2に挙げた4つの項目がその拘束をゆるめる重点となろうが

八雲町の現状では、その中の(3)1頭当りの生産量増、(4)育成牛率の減、の方向には進められていないようである。(1)の飼料作物反収増は確かに認められるが、それでもなお、(2)の購入飼料増に一部頼らざるを得ない状況とみられる。

(4)は育成牛の消流とも関連があるので、一概にその可否は論ぜられないが、少くとも(3)の1頭当生産量が、他地区の水準を上廻るようであれば、集約的酪農を標榜するには至らないのではなからうか。

もちろん、中には、この面でも秀れた経営があるけれども、全体としてはその段階には達していない。施設・機械あるいは日常作業の中に、着実で、無駄な生産費増を抑える道を歩む様子がよくみられるが、これがさらに、(1)・(3)の数値に表れた時、積極的な集約酪農の典型になり得るのではないかと考える。